



○チャパツ

「烏の濡れ羽色」という表現があります。日本女性の美しい黒髪のことを指したほめ言葉でしょうか。金髪は主にヨーロッパ圏の方々に多いようです。数パーセントくらいの少数派だそうです。「赤毛のアン」という物語もありましたね。白髪は年齢による変化が主なものですが、ほれぼれするような白髪の方もいらっしゃいます。ある意味あこがれます。白髪と黒髪が混ざったときの美しさを「ロマンスグレー」と呼ぶことがあります。これは和声英語で本来は「Silver-gray hair」と表現するそうです。「栗毛色」という表現もありますが、もとは馬の毛並みに使われているようですね。白髪染めの商品を説明するときによく使われていたように思います。

髪の色についての話題ですが、世界中を見るとたくさん色がありますね。茶色は世界中に多い色だそうです。しかし「チャパツ」という表現は日本でマイナス面を含んだ言い回しで使われることが多いですね。本当は「茶色」にもさまざまな種類があるのですが、よくひとくりにされて批判的に使われます。なぜでしょう。

主に中学生・高校生を“指導”するときなどに使われることが多いと思います。通常の日本人の本来の黒色を違う色に変えるという時、何らかの意図が伺えます。権力に対抗するための道具(表現手段)、若い年代にある冒険心、異性にもてたい願望、このほかにもあるでしょうか。私自身は若いころ(教員になる前)に頭にパーマをかけ、ひげを生やしていました(54号照会)ので気持ちはよく分かります。今の時代に私が若者だったら冒険心からどこかの段階で染めているでしょう。

中学・高等学校では日本全国ほとんどの学校が「チャパツ」を禁じていると思います。いろいろな理由があるでしょうが、おそらくどこでも共通なものは「その子の将来の選択肢を狭くさせない。」ことにあると思います。赤ん坊がハイハイをし、歩くようになり、ことばが使えるようになって世界をどんどん拓げていくように、中・高校生の時はいろいろなことが吸収しやすい年齢だと思います。自分自身の質を大きく高めることができる時期ですね。

茶色にもいろいろありますと言いましたが、セピア色のことを少し紹介します。私は油絵を始めたころ、画材屋さん並べてある絵具を眺めていて、特に何の考えもなくこれを下書き用に使おうと思って購入しました。セピア(sepia)は黒に近い茶色で、もとは烏賊(イカ)の墨から作られていたのだそうです。烏賊そのものを指すことばでもあります。「セピア色の思い出」などと表現すると、色あせた昔の写真などを想像し、郷愁を誘うような雰囲気もありますね。その頃の私はなぜかできるだけ“地味”に過ごそうとしていた時期だったので、この色を選んだのだらうと思います。しかし色彩感覚の鈍い私の絵は全体的に暗くなり長い間苦勞してしまいました。

墨に関連しますが、硯で擦った墨は強いですね。古い看板など板が全体的に風化していても墨で書かれた文字の部分は立体的に残っているというものをよく見かけます。京都の二条城には修学旅行でよく訪れました。廊下の板に描かれた絵画でも多くの色が退色している中、墨の黒は力強く残っています。

さて昨日偶然にも雪舟の幻の作品が見つかったという報道がありました。私は学生時代に鳥獣戯画や雪舟の山水図などを模写する機会がありましたので、水墨画にも興味があり雪舟の画力も実感しています。山口にゆかりがあり、これは大きな財産ですね。

いつものように話題が広がってしまいました。

山水画賛

秋冬山水図 (冬景図) 東京国立博物館蔵



Wikipedia から